

「大地」誌 に発表された

# 幸 徳 事 件



はしもと・よしはる 訳

## はじめに

本書の原文は本年6月、米国人でI. W. W.に属するフランク・ゴールド君から惠与されたものを用いた。ゴールド君は昨年秋、日本を訪れ、特にアナーキスト運動に関心があつて、若い人びとの集会で話しあい、米国の事情を語つたが、たまたま私宅で、塩田庄兵衛編「幸徳秋水の日記と書簡」の内、アルバード・ジョンソンに興味をもち、本国へ帰つて、調べるとの由であつた。その後、ジョンソンに就いては不明だが、エマ・ゴールドマン主宰の「大地」誌に発表された幸徳関係の記事を複写したとの連絡があり、再度、訪日の際、記者に手渡された次第である。複写原本はイリノイ、エヴァンストン在、ノース・ウエスタン大学図書館に保存されたものを使用したと言ふ。

記者は以前、幸徳関係の書を調べていた時、海外でも幸徳事件の際、反響があり、例えば作家、ジャック・ロンドン等の抗議運動が起きたのを知つたが、その詳細はつまびらかにしなかつた。今度、この記事によつて、その大要が判り、ほぼ70年前とはいえ、また宇宙衛星などという同時ナマ中継放送のなかつた時代に、海の彼方で大体正確な事情が知られていたのを驚くと共に、非常に歎ばしく思う者である。幸徳事件は、明治政府の民衆運動に対する弾圧の第一歩で、政府というものほどのやうな形態にしる、何時かはかやうな事件をねつ造しなればならぬ性質のものであるのを遺憾なく証明している。しかも現在に至つてもこの裁判のやり直し運動は地道に続けられ、法律は事件が旧憲法と共に失効したとして取上げようとはしない。ならば民衆の出来ることは事件の内容をよく知つて、それがどんなに不当であつたか、また今後ともかやうな事件の再発に備え、どうすればよいかをわきまえるのが知恵と言ふものである。

幸徳秋水は自覚したアナーキストであつた。1905年8月10日付ジョンソン宛の手紙によれば、「実を申せば、私はマルクス派社会主義者として入獄しま

※

したが、ラジカルなアナキストとして出獄しました」とある。これが巢鴨刑務所へ入っていた時期であるのは明白だ。この回心は大体クロボトキンの著作を熟読することで成遂げられたのである。中江兆民から受継いだ自由思想、フランスの啓蒙思想内に含まれた唯物論は幸徳秋水を社会主義へ向かわせ、平民新聞紙上での日常活動を通じて、アナキズムへ開花して行ったものと考えられる。近世のアナキズム運動は言うまでもなく、フランス革命の自由・平等・博愛を起点にした社会運動である。どのような政府もその存在を認めず、これを共同体から成る社会に置き換えようとする運動であって、その紐帯は博愛から転化した連帯（ソリダリティ）によるのである。クロボトキンはこの連帯が相互扶助であると見た。農村にはミールのような農村共同体を、都市には職業人組合としてのギルドの育成を、そして知識と労働の細分化でなくその人間的回復を提唱したのである。

幸徳秋水は「大地」誌で言われるように「クロボトキン主義者」であった。それはクロボトキンの著作に親しみ自らを鍛えあげた主義者なのである。ただ日本の1901年～1910年の状況は日露戦争を通じて、ロシアに勝った大勢から一挙に大国意識を生み、民衆の社会的自覚は偏狭なナショナリズムへ吸収される過程にあった。この時期の国家社会主義とは、社会主義＝労働の自主管理を一国家の枠内に押しこめ、民族の自決権を前に押出すことによって、内部では民衆を抑圧し、外に向かっては帝国主義的侵略を計る仮面であった。

本書では初めアルバート・ジョンソン宛幸徳秋水の手紙は削除する予定でいた。理由はこの英文手紙は既に梗概を付して未来社版、塩田庄兵衛編「幸徳秋水の日記と書簡」にまとめられていること、また幸徳の英文は簡略で原文にあたれば容易に判ると思ったからである。しかし「大地」誌では1910年10月号から1911年11月号まで大体1年間毎号事件の経過を発表し、しかも秋水の手紙で完結しているため削除する訳にはいかないと考え直した。また幸徳事件の主要

な紹介者ヒッポリート・ハウエルによれば「手紙を編集するのはその魅力と単純な美しさを損う」からそのまま掲載すると言う。秋水の英文手紙は身の報告であると同時に彼の豊かな人間性の発露が認められるのである。訳者は蛮勇を振って、敢えて和訳を施した。語学に興味のある人は先の未来社版に依って原文を確かめられるがよい。

はしもと・よしはる

1970年11月1日

※1905年1月28日幸徳秋水は「平民新聞」誌上の〈小学教師に告ぐ〉その他の筆禍で巢鴨監獄に入る。7月28日出獄。(岩波版、平民新聞論説集による。)